



第16回大会

▶ 大会報告

▶ 公演

▶ シンポジウム

▶ 研究発表 A室 [1日目]

▶ 研究発表 A室 [2日目]

▶ 研究発表 B室 [1日目]

▶ 研究発表 B室 [2日目]

▶ 作品発表

▶ ラウンドテーブル1

▶ ラウンドテーブル2

▶ ラウンドテーブル3

過去の大会

▶ 第15回大会

▶ 第14回大会

▶ 第13回大会

▶ 第12回大会

▶ 第11回大会

▶ 第10回大会

▶ 第9回大会

▶ 第8回大会

▶ 第7回大会

▶ 第6回大会

▶ 第5回大会

▶ 第4回大会

▶ 第3回大会

▶ 第2回大会

ラウンドテーブル1

ユニバーサルデザイン(UD)絵本

話題提供者 攪上久子 (世界のバリアフリー絵本展実行委員長)
武田美穂 (絵本作家)
コーディネーター 林左和子 (静岡文化芸術大学)

前日のシンポジウム「共に生きること 絵本にできること」に引き続き、身体的、知的特性、年齢、文化を超えてみんなが楽しむことのできるユニバーサルデザイン(UD)絵本をテーマとした。

ラウンドテーブルは、攪上氏の、特別な配慮が加えられた本や一般絵本として出版されているが立場を超えて一緒に楽しむことのできる絵本の紹介から始まった(文末で紹介された絵本一覧を付した)。

特別な配慮が加えられた絵本には、点字付絵本、さわって楽しめる絵本、音の出る絵本、手話絵本、布の絵本など様々ある。大会のテーマ「あれも絵本 これも絵本」である。こういった多様な形態の絵本に触れることは、「絵本とは何か」「絵本とおもちゃはどう違うかの」を考える機会となった。



話題のひとつは、特別に作るということではなく、一般に作られている絵本の中にユニバーサルデザインのものを作っていける可能性があるのではないかとことであった。特別な配慮が加えられた絵本の多くに共通しているのは、読者対象が限定されている＝販売部数が限られること、印刷や製本などのコストがかさむことで、この結果、商業ベースにはのりにくい。この問題に対して、北欧では、絵本を楽しむことはすべての人のもつ権利という思想の上で、政府が出版援助を行っている。フランスやイタリアでは、出版にかかるコストを低く抑えるため、印刷や製本を工夫している。だが日本の場合にはそのような社会の仕組みはない。シンプルに絵だけでストーリーがつくられている絵本や視覚的イメージがないオリジナルなさわる絵本のように、読者対象を広げることで商業ベースにのせていくことに可能性が見いだせるのではないかと。

また、日本では、1970年代以降、主にボランティア団体により、布の絵本やさわる絵本が制作、提供されてきた。紹介された2点の布の絵本『(た)のしいどうぶつえん』と『フレンチトーストをつくろう』はいずれもボランティア団体の手によるものである。この2作品に限らず、内容、工夫ともに高い水準の作品を制作しているボランティア団体は少なくない。ただ、基本的に手作りとなるため、同じものを多数制作し、広く提供していくことは困難である。作品の保存、団体の継続といった点でも不安が残る。この点で、公益財団法人として布の絵本や拡大写本の制作や貸出(郵送)、製作キットの販売などを行っているふきのとう文庫は、日本における一つの可能性を示しているといえるかもしれない。

布の絵本が肢体障害や知的障害のある子どもを主な対象として工夫されているのに対して、さわる絵本は、主に視覚に障害のある人を対象としている。さわる絵本の制作にたずさわるボランティア団体がある。市販の絵本をさわる絵本に変換する取り組みは多く、今回紹介された中にも、レオ・レオニの『あおくとときいろちゃん』のさわる絵本版(フランスで出版)が含まれていた。こういった変換が、著者以外の人によって行われる場合、翻訳に似た再創作作業となるだけに、原作者の思いが忠実に反映されるかどうかといった問題が生じる。ラウンドテーブルで話題になった二つ目の点はこのことであった。絵本作家の武田氏が率直にその思いを語ってくださった

が、絵本の場合、作家は、表紙から裏表紙まで、そしてページをめくことで場面が展開していく効果まで含めて作っている。

変換した場合、その意図はどこまで反映されるのであろうか。出版・販売される作品については許諾が必要であり、著作権者(主に原作者)が確認を求めることも可能である。しかし、現行の著作権法では、販売を目的とせず「専ら視覚障害者などで当該方式によっては当該視覚著作物を利用することが困難な者の用に供するために必要と認められる限度において」は、必要な方式への複製(変換)は許諾を得なくてもできることになっている。つまり原作者の知らないところで、変換された作品が原作者の名前で提供される可能性があるということである。

ボランティア団体の作品の著作権についても配慮が必要である。それぞれの団体の創意・工夫はその団体の権利であり、営利を目的としていないからといって侵害してよいものではない。著作権法でいう複製には、色を変えるなどの変更を加えないこと、原作者(団体)名の表示をすることは含まれると考えられる。

UD絵本の発展のためには、それぞれの権利を守る仕組み、及び配慮を加えた作品を出版・販売することができる仕組みが整えられていくことが求められる。さらに、シンプルにすることでユニバーサルを目指した絵本の創造も求められる。街の本屋さんや、図書館などどこでも、すべての人がそれぞれ楽しむことのできる絵本、RIGHT BOOKを見つけ出せることができる社会をつくっていくために、何をしなければならぬか、を考える機会となった。すぐに解決できる課題ではないが、会場から、絵本学会こそ、それを考えていくことができる場なのではないかという発言があったことに、希望を感じた。(文責 林 左和子)



●紹介された絵本リスト

1. 配慮が加えられた絵本

『The Dot』 作:Reynolds, Peter H. 出版社:BrailleNK (USA) (オリジナル:Candlewick Press) 原本:『てん』作・絵:ピーター・レイノルズ 訳:谷川 俊太郎 出版社:あすなろ書房 [点字付き絵本]

『てんじつきさわるえほん しろくまちゃんのほっとけーき』わかやまけん 出版社 ごとま社

『Petit-Blue et Petit-Jaune』作:レオ・レオニ 出版社:Les Doigts Qui Révent (フランス) 原本:『あおくとときいろちゃん』作・絵:レオ・レオニ 訳:藤田 圭雄 出版社:至光社をさわる絵本としたもの

『Wir Geschwister』(ぼくたち 兄弟)作:Kremer, Susann 出版社 Quirl (ドイツ) [さわる絵本]

『De wereld van Nijntje. Een doe-, voei- en luisterboek』(ミッフィーの世界 遊んでさわって聞ける絵本)作:ディック・ブルーナ 出版社:Rubinstein (オランダ)

『Simon går till affären』(サイモンの買物)文:Rehn, Annika 写真:Billeson, Göran 出版社:Landskrona Vision (スウェーデン) [手話・Easy to Read]

『Handtalk Zoo』(手でお話し動物園)作:Ancona, George Mary Beth Miller 出版社 Four Winds Press (USA) [手話絵本]

『たのしいどうぶつえん』よこはま布えほんぐるーぷ [布の絵本]

『フレンチトーストをつくろう』てのひらの会 (三鷹市) [布の絵本]

『これ なあに?』作:バージニア・A・イエンセン&ドーカス・W・ハラー 出版社 偕成社 [さわる絵本]

『Petit Souffle de vent』(風が吹いて)文:Lodolo, Elisa 絵:Rintala, Aune 出版社: Fed. Nazionale delle Istituzioni Pro Ciechi/Les Doigts Qui Révent [みんなにとって見えないものをさわる絵に]

『Trotti, trotta, Coccinelle s'en va』(てんとう虫 山へ行く)作:mantacheti, Tiziana 出版社:Les Doigts Qui Révent (フランス) [さわる絵本]

2. 一般絵本でも楽しむことのできる絵本

『Ida e volta』(平かな足) 作:Machado, Juarez 出版社 Primor (ブラジル)


『くもさん おへんじ どうしたの』作:エリック・カール 訳 もり ひさし 偕成社

『なみ』作:スージー・リー 出版社:講談社

『ポッキーのわくわくサンドイッチ』作:柳沢幸子 出版社:世界文化社 紙芝居

『みんなでぼん!』 作:まついのりこ 出版社:童心社

『かぜが はこぶ おと』作:駒形克己 出版社:ONE STROKE

[ページのトップへ](#) 

Copyright The Association for Studies of Picture Books